

自利利他

永田円了

Give And Be Given

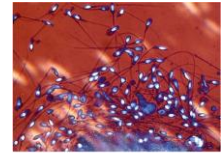
人は日常「自利」を優先して生きている。またその一方で、純粋な「利他性」をもっている。人は利他的な行為を見聞きすると、本能的に幸せを感じる。特に自己犠牲を伴う高次の利他行動には、感動を覚える。

今回は、人間のもつ利他性は、果たして先天的に遺伝子に組み込まれているのだろうか。もしそうなら、どのようにして、その利他性を引き出せるのか。高次の利他性は、どのような環境で現れるのか、またそれを阻むものは何か。このようなことを明らかにしてみたい。

精子は自利利他

生命学者、柳澤桂子さんは人の精子について次のように語っている。1度に射精される精子は4億とも5億とも言われている。射精された精子は、一目散に卵子めがけて突入する。し烈な競争である(自利)。

しかしよく観察すると、一匹の精子が卵子に入るために、およそ5億の精子が助け合いながら、自己犠牲を伴う利他行為(死)をもって、一つの生命を誕生させているのである。このように人には、本能としての利他が存在する。ではこの利他性は、あるとき突然に、何もしないで自動的に出現するものなのだろうか。



五億の精子

本能と学習



サルがヘビを恐れるのは、本能からなのか、学習の結果からなのか? アメリカの心理学者、スーザン・ミネカの実験で、妊娠した野生の雌ザルを捕らえて実験室で出産させ、その子ザルを育てた。子ザルが大きくなったとき、その檻にヘビを入れても子ザルたちは怖がる様子はみせなかった。

次に、その子ザルを、野生だった母ザルと一緒に檻に入れて、ヘビを入れてみた。すると、ヘビをみた母ザルは、歯をむきだして、檻の中を逃げまどった。その様子を見ていた子ザルは、それ以後、ヘビを怖がるようになった。子ザルはヘビを怖がることを、母ザルから学習したことになる

さらなる実験がなされた。ヘビを見て逃げまどう母ザルの様子をビデオに撮り、その映像を子ザルに見せた。子ザルはビデオの映像からも学習して、ヘビを怖がるようになった。今度は、ビデオの映像を細工し、ヘビの部分を消去し、そこに花がもってきた。子ザルは花を見て逃げまどう母親をじっと見ていたが、花を怖がるようにはならなかった。子ザルは、ヘビを怖がる母親からヘビを怖がることを学習したが、花を怖がる母親から、花を怖がることを学習しなかった。つまり、子ザルは、ヘビを怖がる本能はもっているが、花を怖がる本能はもっていないということが分かった。結論: **学習は本能があってはじめて可能になる。**

高次の利他性を阻むものはなにか

三島由紀夫は言った。「人間は自分のためだけに生きるのに卑しいものを感じる」と。では、この崇高な利他性を阻むものはなにか。

それは人の思考(マインド)である。マインドは、自分が生きることのみを考える。「生きる」ことのみを考えたとき、人は他人を蹴落としてでも自らが生きることを正当化できるのである。ではどうしたら高次の利他性を発揮できるのか。自己超越である。自己を超えた領域、対置概念のない世界、生も死もない空間にはいった時のみ、人に本来の、高次の「利他性」が自ずと現れてくる、と感じる。



<事例>

- アーミッシュ/13歳の少女が高次の利他性を発揮
- 柳澤桂子/精子の利他性
- 生物の利他性/ライオンvs.バッファロー、母ガゼルの必死の子救い、ギンガメアジのいたわり
- 大江光さんの利他性、学習
- コトバの力で利他性を引き出す/盲人 in New York
- 三島由紀夫/人間が自分のためだけに生きることに卑しいものを感じる
- 西部邁/三島由紀夫の死生観を語る
- 山田邦男/自己超越が人間の本来のあり方
- 米映画『ある戦慄』 The Incident いざという時、あなたならどうする
- 歌・we are the world



1967年 米映画